

戦後初期国語教育と石森延男

——国定国語教科書の教材分析をとおして

宇賀神 一

キーワード：石森延男 国語教育 国定教科書 言語教材 修身性

1. はじめに

石森先生は、教員志望のわたしたちの、今日でいうなれば、理想の人間、いや教師像であった。「いわゆる期待される人間像」なんていうような、そんなけつたいなものじゃなくて、先生となるなら石森先生のような先生にというようなあこがれの姿である。

小学校長を務めた吉本豊は、香川県師範学校在学中にわずか1年のみ教えを受けた国語教育者・石森延男(1897-1987年)を指してそう述べた¹。喜田滝治郎もまた、石森こそ「生き死にに関することを相談しにいく、とっておきの先生」²だという思いを語る。

高名な国語教育学者たちも石森の仕事を礼賛しており、元日本国語教育学会長の倉沢栄吉は「戦後日本の国語・国語科教育の最大の功労者」³として石森の名をあげ、野地潤家は石森を「近代国語教育の本流に棹さしつつ、前人未到の仕事をやむむことなく集積」⁴した人物だと評した。

石森の仕事として知られることのひとつが、1947(昭和22)年度より使用された第6期国定国語教科書、通称「みんないいこ読本」(以下、通称を用いる)の編纂である。同書は「ほとんど石森延男の独力によって一気に編集された」⁵ものであり、その仕事により「その後の五十年の国語教科書づくりの基礎的な立場が作られた」⁶とされる。とはいえ、こうした評価は理論的検討を経て出されたものではなく、あくまでも印象論の範疇だといえる。

石森を戦後国語教育の重要人物とする評価に疑問を呈したのは渋谷孝である。渋谷は石森が第二次世界大戦期に国民学校で使用された第5期国定国語教科書、通称「アサヒ読本」(以下、通称を用いる)の編纂にかかわったこと、さらに遡れば「満洲」⁷で日本人子弟用国語副読本『満洲補充読本』の編纂に関与したことなどの経歴を明らかにしながら、「これからの追究すべき問題の一つは、第五期と第六期という全く対照的な教科書づくりの指導者が同一人物であったこと、しかも極めて短期間に為されたことの意味するもの、現代日本国語科教育思想史の問題として検討すべき」⁸だと指摘して、戦前・戦中の仕事を含めた通史的検討の必要性を提起した。

その後、磯田一雄によって『満洲補充読本』の内容分析が行われ、石森が編纂に参加して以降の改訂により「日本人中心主義になり、進んでは日本の国家意識ないし国威発揚を思わせる

ような面が少しずつ出てきている」⁹ことなどが明らかにされた。また、森かをるにより、「アサヒ読本」とその前身の第4期国定国語教科書に収録された「満洲」に関する教材のモデルとして、石森が編纂した児童文学叢書『満洲文庫』（東洋児童協会、1934・1935年）の存在があったことが指摘された¹⁰。

21世紀に入ってから、石森に関する通史的研究が国語教育思想史における「重要課題」¹¹「大きな課題」¹²であることが度々確認された。しかし、その後は吉原英夫によって石森が執筆した国語教育関連の著作・論文が整理され¹³、安直哉によって石森の書簡が発掘・紹介されたのみであり¹⁴、石森の仕事に関して通史的に検討する視座をもった研究は行われてこなかった。

こうした課題を踏まえて、筆者はこれまでに、石森の東京高等師範学校在学期における活動、第二次世界大戦期の国語教科書編纂の仕事、戦後初期の文部省における役割を検討してきた¹⁵。本稿は、以上の研究の続報として、戦後初期の小学校で使用された3種類の国語教科書——「墨ぬり教科書」「暫定国語教科書」「みんないいこ読本」に着目して、石森の執筆教材（以下、石森教材と表記する）¹⁶の分析を行う。その作業をとおして、これまで印象論的に語られてきた戦後初期の石森の仕事を具体的に即して検討していく。

これらの国語教科書の性格については、唐沢富太郎『教科書の歴史』（創文社、1956年）などの教科書史研究のなかで論じられており、散逸した教科書を蒐集・分析した吉田裕久『戦後初期国語教科書史研究』（風間書房、2001年）によって、その編纂過程や教材の特徴が詳細に検討されている。こうした先行研究の成果にも導かれながら、石森の仕事の跡を辿ってみたい。

2. 「墨ぬり」にみる石森教材の課題

1) 二つの「墨ぬり」通牒と石森教材の扱い

戦後の国語教育では、まず、「アサヒ読本」後期用（偶数巻）のなかから不適当な教材を削除・修正（以下、「墨ぬり」と表記する）した「墨ぬり教科書」が使用された。「墨ぬり」は、実際には「1冊として同じものは存在しない」¹⁷と指摘されるように多様であり、本稿では文部省から出された二つの「墨ぬり」通牒に照らして石森教材の内容を分析する。なお、すぐに述べるように、「墨ぬり」が行われたのは1945（昭和20）年9月と翌年1月であり、その対象は自ずと後期用（偶数巻）に限定されることは予め抑えておきたい。

まずは通牒の概要を確認しておこう。1945（昭和20）年9月15日、文部省は「新日本建設ノ教育方針」を公表して教育の方向性を示し、そのなかで教科書について、「新教育方針ニ即応シテ抜本的改訂ヲ断行シナケレバナラナイガ差当リ訂正削除スベキ部分ヲ指事シテ教授上遺憾ナキヲ期スルコトヲナツタ」と定めた。そして同月20日、「訂正削除スベキ部分ヲ指示」するために「終戦ニ伴フ教科用図書取扱方ニ関スル件」（以下、「第一次通牒」と表記する）が移牒され、「削除スベキ教材」と「取扱上注意ヲ要スル教材」が示された。

「墨ぬり」の基準は、「国防軍備等ヲ強調セル教材」「戦意昂揚ニ関スル教材」「国際ノ和親ヲ妨グル虞アル教材」「戦争終結ニ伴フ現実ノ事態ト著ク遊離シ又ハ今後ニ於ケル児童生徒ノ生活体験ト甚シク遠ザカリ教材トシテノ価値ヲ減損セル教材」「其ノ他承認必謹ノ点ニ鑑ミ適当ナラザル教材」であり、「墨ぬり」する教材は石森ら文部省職員が選択した¹⁸。

文部省が自主的に作成した「第一次通牒」とは異なり、GHQ/CIE の影響下で作成されたのが、1946（昭和 21）年 1 月 25 日に公示された「国民学校後期用使用図書ノ削除修正箇所ノ件」（以下、「第二次通牒」と表記する）である。「第二次通牒」では、削除する教材のほか、部分的に削除・修正する教材とその具体が指示された。同通牒における「墨ぬり」教材の選択基準を、『日本教育』に掲載された「マ司令部民間情報教育班資料解説 教材削除の基準をどこにおくか」により知ることができる。それによれば、「墨ぬり」の対象は「(一) 軍国主義、(二) 極端なる国家主義（以下、超国家主義と表記する——引用者）、宗教上の差別感即ち国家神道」の「三つの原則」¹⁹により選別された²⁰。

ここで、両通牒による「墨ぬり」の全体像を、表 1 に示す²¹。「第一次通牒」では 32 教材が削除、5 教材が取扱注意とされた。一方、GHQ/CIE が作成に関与した「第二次通牒」では、51 教材が削除、20 教材が一部削除・修正とされており、その数は 2 倍に増加した。とりわけ 3 年生以上巻の教材において「墨ぬり」教材が多いことが確認できる。

石森教材の場合どうか。表 1 でみたように、1 年生用の 9 教材、2 年生用の 3 教材、3 年生用の 3 教材、4 年生用の 3 教材、5 年生用の 3 教材、6 年生用の 1 教材の計 22 教材が石森の手になる教材であった。このうち「第一次通牒」で削除とされたのが 2 教材、取扱注意とされたのが 1 教材である。対して「第二次通牒」では、6 教材が削除、4 教材が一部削除もしくは修正となっており、3 年生用以上の教材は「養老」（『初等科国語 II』）以外すべてが対象である。

2) 「墨ぬり」の内容——石森教材が内包した戦時色

では、具体的に石森教材のどのような内容に「墨ぬり」が行われたのか。「第二次通牒」の「墨ぬり」基準——軍国主義、超国家主義、国家神道に即して分析してみよう。

軍国主義に該当する教材の一つが「雪合戦」である。同教材は授業中の児童が二組に分かれて雪合戦を行うという内容であり、「両軍」「みかたの城」「敵」「攻撃」「万歳」などの軍事に関連する用語が散見される。教師用書では、同教材をとおして「戦闘的意識に燃えたち、友軍を激励しつつ突撃する」様子を確認させ、「奮戦の有様を想像させ、必勝の信念を養ひ、一致団結の力を感得させ」²²と説明されており、少国民としての心構えを育てようとしたことは明白である。如上の「マ司令部民間情報教育班資料解説 教材削除の基準をどこにおくか」のなかでも、「雪合戦の教材の如き戦争ではないが戦場になぞらへた闘争をもつて全体が構成されてみて、これが子供を戦闘へと誘つてゐる」²³として名指しで取り上げられている。

おなじく削除された「水師営」は、乃木希典とロシアのステッセルの水師営での会見の場面

表1. 「墨ぬり」の全体像

	1年生		2年生		3年生		4年生		5年生		6年生			
	ヨミカタニ	第一次 第二次	よみかた四	第一次 第二次	初等科国語二	第一次 第二次	初等科国語四	第一次 第二次	初等科国語六	第一次 第二次	初等科国語八	第一次 第二次		
1	山ノ上		富士山		神の剣	◆	▲	船は帆船上	×	×	明治神宮	×	王のひびき	▲
2	アソカハツノボウクワイ		早鳥		稲刈			船はどこへ行く	×	×	水兵の母	×	山の生活二題	▲
3	ウサギトカメ		海軍のいっさん	×	祭に招く	×	×	バソナ	×	▲	姿なき入城	×	▽バオへ	×
4	ラジオノコトバ	×	乗合自動車	*	▲	村祭	×	大道から	×	×	稲むらの火	×	孔子と顔回	×
5	西ハタヤケ	*	菊の花		×	田道間守	◆	艦艦式	×	×	朝霧のみなか	◆	奈良の四季	×
6	カマキリチイサン		かけっこ		みかん		▲	くりから谷	×	×	月の世界		万葉集	▲
7	サルトカニ		かぐやひめ		潜水艦	×	×	ひよどり越	×	×	柿の色		修行者と羅刹	
8	オチバ	*	たぬきの腹つづみ		南洋	×	×	万寿姫	×	×	初冬二題	×	▲	国法と大慈悲
9	イモヤキ	*	金の牛	*	映画	×	▲	林の中	×	×	十二月八日	×	×	母の力
10	コモリウタ		満洲の冬	*	◆	聖徳太子		グライダ「日本号」	×	×	不沈艦の最後	×	×	鎌倉
11	オイシヤサマ		織		▲	養老	*	大演習	×	×	世界一の織機	*	▲	天広がりに
12	デンソヤエッコ		神だな		×	ぼくの強盗線		小さな伝合使	×	×	水師官	*	×	菊水の流れ
13	ケンチヤン		新年		火事			川土手	×	×	元旦や		▲	▽ライを進む
14	冬	*	いうびん		軍隊	×	×	扇の的	×	×	源氏と平家		×	静寛院宮
15	お正月		いっさんの入宮	×	ぬまん袋	×	×	弓渡し	×	×	漢字の音と訓		▲	シンガポール陥落の夜
16	氏タエエッコ	×	雪の日		雪合戦	*	×	山のスキー場	×	×	塗り物の話			もののふの情
17	ネズミノヨメアリ		白兔		菅原道真			広瀬中佐	×	×	はらの芽		▲	太鷗
18	シヤソソ	×	たごあげ		梅			大阪	×	×	敵前上陸		×	梅が香
19	カガエ	*	豆まき		小さな温泉			大砲のできるまで	×	×	病院船	◆	×	雪国の春
20	日本のしるし		金七くんしやう	×	雪舟			擬子時計			ひとさしの舞	*	×	国語の力
21	花サカチイ		病院の兵たいさん	×	×	三勇士	×	水鏡鏡			▲			
22	ユメ		支那の子ども	×	×	春の雨		母の日			防空監視哨	*	▲	
23	根とこしかけ	*	おひな様		大れふ			防空監視哨	×	×	×		×	
24	ウラヒス	*	北風と南風		東京	*		早稲の満洲	*	×	×		×	
25	ワラシ													
26	汽車	*												

【註】
 ・「×」は削除、【◆】は取扱注意、【▲】は一部削除もしくは修正された教材である。
 ・「初等科国語二」の「田道間守」は、「第二次通集」では「今は可、天皇制の問題を決定後は考慮」とされた。
 ・「*」は石森の執筆教材である。

を扱った教材である。両者が軍人として互いを認め合う様子が美談に仕立てられており、息子の戦死をも深く受け入れた乃木の態度が讃えられている。先にみた「第二次通牒」のなかの「武功ヲ賞讃スルコトニヨツテ戦争英雄ヲ理想化スル教材」、あるいは「軍務ニ服スルコトヲ以テ国民ガ国家ニ尽ス最大ノ荣誉ナリトスル観念ヲ発展セシムル教材」²⁴に該当するものである。

教材の一部が「墨ぬり」された「山の生活二題」にも注意が必要である。銅山の採鉱と岩を切り崩す仕事を題材にした同教材は、合計6箇所「墨ぬり」の指示が出されており、たとえば鉱石の用途として「弾丸になり、武器になり、機械になる貴い銅が、この鉱石の中に眠つてゐるのだ」と説明した箇所や、鉱員が「なれないどころか、戦線に弾丸を一発でも多く送つてやりたいと思へば、いくら働いても、なほ足りないやうな気がする」と心意気を述べた箇所などに軍国主義的内容が看取される。

超国家主義に該当する教材としてまず挙げたいのが、「満洲」の雄大な自然と、そこに春が訪れ人々のあいだに喜びが溢れていく様子を描いた「早春の満洲」である。同教材の趣旨は、教師用書によれば、「満洲に対する憧憬の念を深め、親愛の情を増さうとするもの」であり、「大陸早春のやうすを想像させ、日満親善の素地に培ひ、日満一体たる国家的使命を感得させようとする」²⁵のだという。当然ながら、ここで謳われる「日満親善」を言葉どおりに受け取ることにはできない。「満洲国」は「国際連盟が成立し、武力による植民地獲得競争が過去のものになりつつあった時期に、日本が虚偽の謀略を理由に中国の領土を占領した」²⁶実質的な植民地であった。「墨ぬり」の基準のうち、「大東亜共栄圏建設ノ原理及ビソノ他アラユル侵略思想」や「国際連合ノ憲章ニ示サレタル原則ニ違背スル観念及ビ態度」²⁷を育てようとしたものとして削除対象になったことが推察される。

「大連から」は、「満洲」の小学校教員から「内地」の教え子に宛てた手紙であり、その手紙をとおして「満洲」の様子が紹介される。本文中で、「満洲」において他民族が日本語を当然のように使用する場面が描かれており、「日本人ハ他ノ如何ナル民族又ハ国民ヨリモ優秀ナリトスル思想」²⁸を内包する教材だといえる。

国家神道を扱ったものとしては、前出の「山の生活二題」のなかに「厳かな国民儀礼を行つたのち、いつせいに体操をする」「坑口には、大きな神棚があつて、その下を通過する時、鉱員たちは、『無事に働かしてください。』と心から祈る」という記述があり、双方とも「墨ぬり」の対象になっている。

このように石森教材には「墨ぬり」を免れ得ぬ内容が確認されるのであるが、「第二次通牒」で問題にされたこれらの教材のほとんどは、石森自ら「墨ぬり」対象を選定した「第一次通牒」では見逃されている。もちろん、終戦から間もない時期に、それまでの自身の仕事を批判的に見直すことが困難であることは想像に難くない。その意味で、「第一次通牒」における「墨ぬり」認識の甘さのみをもって、石森の思想的課題として追及するのは短絡的である。しかしながら、石森の場合こうした態度が戦後も一貫していたことは確認する必要がある。「墨ぬり」を回想し

た次の言説をみてみよう²⁹。

きのうまで、全国民が望んでいた道理がきょうは、たちまち間違いだとしなければならない。きのうまでだれひとりまっこうから反対するものもなかった教材を、きょうは、罪人のように罰しなければならない。なるほど表面的に機械的に判断すれば、その当否を決定できないこともない、しかしそのことに直面しては、さすがに難しい仕事であった。

石森においては、軍国主義と超国家主義に基づく「アサヒ読本」は終戦から20年が経過してなお、当時の「全国民が望んでいた道理」を具現化したものという位置づけなのである。戦中の仕事に対する無自覚・無反省と、石森教材の内容とそれに対する「墨ぬり」状況を併せてみると、石森の戦争認識や自らの仕事に対する批判の甘さが顕著に浮かび上がってくる。

3. 「暫定国語教科書」の石森教材

1) 「墨ぬり」を免れた石森教材の行方——「暫定国語教科書」前期用

つぎに、「第二次通牒」で「墨ぬり」を免れた教材の内容とその足跡を辿っていこう。その前提として、1946（昭和21）年度に使用された「暫定国語教科書」の成り立ちに触れる必要がある。同書は前期用と後期用で編纂方法が異なり、前期用は、①「墨ぬり教科書」（＝「アサヒ読本」後期用に「墨ぬり」を行ったもの）に収録された教材、②「アサヒ読本」前期用のうち「第一次通牒」「第二次通牒」の内容に照らして選択した教材により構成された³⁰。一方後期用は、1年生用を例外として³¹、すべて新教材により編まれた³²。

いま、「アサヒ読本」前・後期用に収録された石森教材³³と、「暫定国語教科書」前期用の教材の連続・非連続を整理してみれば、表2のとおりである。ここから三つのことが指摘できる。第1に、「第二次通牒」で削除対象とされた教材は、当然ながら「暫定国語教科書」には収録されていないことである。

第2に、「墨ぬり」の対象ではないものの、「暫定国語教科書」の編纂過程で削除もしくは修正された教材が存在することである。「ラジオノコトバ」「西ハタヤケ」「金の牛」「満洲の冬」がそうである。

日本語がラジオ放送をとおして世界中に届くことを喧伝した「ラジオノコトバ」は、「国語の海外進出の一翼をなすもので、世界に進出する国語の現状と、東亜共栄圏の共通語を以て任ずる国語の将来を想ふ時、本教材の重要性がいよいよ痛感せられる」³⁴教材であった。同教材は「満洲」の民話「金の牛」とともに、「暫定教科書」前期用に引き継がれることなく削除されている。「満洲」の夕方の風景を描いた「西ハタヤケ」は、舞台が「満洲」から「北海道」へと変更され、「満洲」を想起させる「カウリヤン」などの文章が削除された。

表2. 「アサヒ読本」と「暫定国語教科書」
前期用の石森教材における連続/非連続

学年	巻	教材名	墨ぬり		暫定
			第一次	第二次	
1	ヨミカタニ	ラジオノコトバ	×		×
		西ハタヤケ			▷
		オチバ			▷
		イモヤキ			▷
		冬			▷
		カゲエ			▷
		机とこしかけ			▷
		ウグヒス			▷
		汽車			▷
2	よみかた三	らくかさん			×
		金魚			▷
		海			▷
	よみかた四	乗合自動車		▲	▷
		金の牛			×
		満洲の冬	◆		▷
3	初等科国語一	川をくだる			▷
		電車			▷
	初等科国語二	養老			▷
		雪合戦		×	×
		東京		×	×
4	初等科国語三	朝の海べ			▷
		とびこみ台			▷
		夕日			▷
	初等科国語四	大連から	×	×	×
母の日			▲	▷	
		早春の満洲		×	×
5	初等科国語五	ことばと文字			▷
	初等科国語六	世界一の織機		▲	▷
		水師營		×	×
		ひとさしの舞		×	×
6	初等科国語七	黒龍江の解氷			▷
	初等科国語八	山の生活二題		▲	▷

〔註〕

- ・「墨ぬり」欄の「×」は削除、「◆」は取扱注意、「▲」は一部削除・修正の対象になったことを意味する。
- ・「暫定」欄の「▷」は再録された教材、「▶」は修正のうえ再録された教材、「×

このようにして、「墨ぬり教科書」の「満洲」の残滓が、「暫定国語教科書」前期用の編纂過程で取り除かれていった。例外として、「満洲」の冬の風物を描いた「満洲の冬」は、「満洲の子どもたち」という記述が「満洲に住んでゐる子どもたち」に修正されたのみで継承された。現時点でその理由は分明的でないものの、駒込が占領政策について論じた、「アメリカもまた自らの国益を追求する帝国主義国家であった」という事実が、植民地帝国日本の歴史を批判する観点の曖昧さを生み出³⁵したという指摘が、教科書編纂上で顕在化したことの一例として理解される。

第3に、「アサヒ読本」から「暫定国語教科書」前期用そのまま再録された17教材(表2「▷」)についてである。石森が戦時下に執筆した教材は、半数以上が戦後の国語教材として適当と判断されたことになる。

さしあたり、高学年用に収録された教材に注目してその内容を確認しておこう。「黒龍江の解氷」は、「黒龍江の解氷時の情景を詩に表現し、早春の歓喜と希望とを具現化し³⁶た散文詩である。本文は、「擬人的な表現によつて、黒龍江の大きな動きを、児童の身近に感じさせる³⁷ことを狙っており、「眠つてゐた黒龍江が、ひとつ大きなあくびをしてから、春のいぶきをいつばいに吸ひ込んだ」「やがて黒龍江は、やさしい手

をひろげ、わが子のやうに満洲をだきかかへて、春の歌を歌ふ」というように黒龍江を擬人化している。こうした工夫により子どもの想像を喚起する、石森の教材執筆上の工夫として捉えることができる。

「ことばと文字」は、「ことばの本質をやや論理的に理會させ、国語に対する自覚と愛護の念を深め³⁸ることを目的とした教材である。意思を伝え合う場面として、会話や手紙などを取り上げ、そのときどきで音声言語と文字言語が用いられていることを意識させようとする。すぐのちにみるように、言語生活を取り扱うこうした教材は、戦後国語教育のなかで重要な位置

を占めることになる。

2) 「暫定国語教科書」後期用における新教材の登場

「暫定国語教科書」後期用が、1年生用を除きすべて新教材により編まれたことは先述した。同書の教材数は、2-5年生用8教材、6年生用5教材の合計37教材である。そのうち石森の手になる教材は、表3にあげた12教材である。多少先取りすれば、これらはすべて次期「みんないいこ読本」の同学年の巻に継承された。

教材の傾向として二つ指摘しておこう。まず「言語知識、言語態度に関する教材」³⁹＝言語教材が散見されることであり、「お話と文」「しんせつ」「お正月遊び」「いろはがるた」「ことば」がそれにあたる。

例として「お話と文」を紹介すると、教員が児童に「文をかくことは、あひての人に、お話をしてあげることとかはりはありません。お話の時は、目の前にあひての人がゐて、いちいちへんじをしてくれますが、文を書く時には、あひての人が見えません。あひてなしには、文は書けるものではありません」⁴⁰と話しかけ、子どもたちは各々が文章を執筆して先生の助言を受けるという教材である。学習者と同じ状況の子どもたちを主人公にして、言語に関する知識や、言語を用いる技術・心構えなどについて学ばせようになっている。同教材は文章を執筆するための具体的な方法が説かれた作文教材であり、この点は後述する。

言語教材については、「設定しはじめたのは、文部省の『みんないいこ』の教科書であって、これは当時の石森監修官の識見によるものであった」⁴¹と指摘されてきた。しかし、国語教科書における言語教材の定位という視点に立てば、「みんないいこ読本」に先立ち「暫定国語教科書」後期用はその方向性が確認される。さらにその源流を辿れば、前項で取り上げた「アサヒ読本」の「ことばと文字」にすでに石森の言語教材への関心と教材化の試みを認めることができる。

つぎに、「がんのなかま」「イソップものがたり」「うさぎさん」「一びきのくも」などの道徳性を学ばせるような物語教材である。たとえば「がんのなかま」は、自分本位な行動で仲間迷惑をかける1羽の雁が、銃で撃たれ怪我を負うも仲間の献身により回復し、その後は積極的に協調するようになるという内容である。「うさぎさん」は、うさぎがほかの動物たちに遊び道具や食料を奪われてしまう。しかし、ほかの動物たちと決して争わないうさぎたちは、その姿勢をみた「神さま」の手によって最終的に救済されるという物語である。

このように、擬人化した動物の生き方とおして道徳を教えようとする教材が用意された。言語教材の場合と同様、こうした教材も「みんないいこ読本」でさらに増加していく。

表3. 「暫定教科書」後期用の石森教材

学年	巻	教材名
2	よみかた四	お話と文
		しんせつ
		がんのなかま
		お正月あそび
3	初等科国語二	いろはがるた
		川のうた
		イソップものがたり
4	初等科国語四	うさぎさん
		汽車の中
		音といふもの
5	初等科国語六	一びきのくも
		ことば

4. 第6期国定国語教科書の石森教材における戦後国語教育の指向

1) 石森教材の全体像と旧国語教科書との連続性

1947（昭和22）年度から「みんないいこ読本」の使用が開始された。同書に収録された石森教材の全体像は、表4のとおりであり、全154教材のうち半数以上の80教材にのぼる⁴²。このうち、「アサヒ読本」から8教材、「暫定国語教科書」後期用からは前節でみた全12教材と⁴³、高等科用『高等科国語二』に収録された「雪の映画」が引き継がれた。

「みんないいこ読本」のなかの石森教材の特徴として、さしあたって、①作文教育の重視、②演劇活動へと展開させる教材の積極的採用、③正しい生き方を説くような道徳的内容の頻出という三つの事柄を指摘することができる。

前節で取り上げた言語教材「お話と文」は、「いろいろなあいて」と改題のうえ「みんないいこ読本」に再録されており、そのほか、石森の手になる言語教材として「ひとつのことばから」「『あ』のつくことば」「ことばあそび」「ことばあつめ」「心に生きていることば」「手ということば」「いいにくいことば」「外国からきたことば」「ことばのはたらき」が認められる。

ところで、「いろいろなあいて」が子どもに文章を書かせる内容であることは先にみたとおりである。「みんないいこ読本」は『国語教科書＝読み物教材集』を脱却して、表現へも広く道を開き、「読本では収まらない広がり」を備えており、『国語』教科書としての一つのあり方を示した⁴⁴と評価されており、「暫定国語教科書」後期用伝来の「いろいろなあいて」のほかにも、多様な作文教材が石森により準備されている。

ほかに目を引くのが、教材を演劇化する意識である。一例を、「アサヒ読本」から再録された「かげえ」にみることができる。「アサヒ読本」の「カゲエ」は、子どもが影絵を観覧して楽しむという内容であった。一方、「みんないいこ読本」の「かげえ」は、「カゲエ」をひらがな書きに改めた「(一)」に加え、あらたに「でる人 いちろう じろう いもうとのさちこ おかあさん」という登場人物と「ところ へやの中」という場面設定のト書きから成る家族劇の「(二)」が加筆されている。「暫定国語教科書」後期用から引き継がれた教材である「イソップものがたり」にも同質の修正が認められ、「みんないいこ読本」のそれはト書きのある演劇化を意識したものに変容している。

「暫定国語教科書」後期用の石森教材にみられた生き方や道徳を学ばせる教材もまた、「みんないいこ読本」のなかに多分に盛り込まれた。教材の修正に着目すれば、たとえば「みんないいこ読本」の「うらしまたろう」は、カメをいじめていた子どもたちが行い自覚し反省する様子や、竜宮城に招待された浦島が礼を辞して見返りを求めない描写など、旧来の教材にはみられなかった記述が加筆されている。

本稿での最後に、これら三つの観点に即しながら、「みんないいこ読本」に収録された石森教材の内容を詳しく分析してみたい。

表4. 「みんないいこ読本」の石森教材

学年	巻	教材名	割合	
1	こくご一	みんないいこ		
		なのはな		
		たまいれ		
		もちもの		
		よみかき		
		あさのこくぼん		
		ゆうぎ		
		あいさつ		
		人のかお		
		手と足		
		ひとつのことばから		
		なつてみたいもの		
		だんだんくわしくなる	14/18	
		山のつつじ	(78%)	
	こくご二	「あ」のつくことば		
		えにつき		
		ことばあそび		
		おはなし		
		山びこ		
		かげえ ●		
		ゆめとつくえ ●	8/9	
		春をむかえに	(89%)	
	こくご三	花まつり ●		
		ことばあつめ		
		学校		
		かえり道		
一まいの紙		6/13		
かぐやひめ ●		(46%)		
2	こくご四	この町		
		いろいろなあいて ◇		
		心に生きていることば◇		
		がんのなかま ◇		
		ことばあそび ◇		
		いろはがるた ◇		
		クリスマス		
		うらしまたろう ●		
	一つのものも			
	四季	11/13		
	はごろも ●	(85%)		
	3	国語 第三学年上	川のうた ◇	
			私の旅	
			石炭	
心と心				
国語 第三学年下		あさがおの花	6/12	
		学級日記から	(50%)	
		イソップものがたり ◇		
		かべ新聞		
		だれの力	5/11	
		たこ	(45%)	

		うさぎさん ◇	
4	国語 第四学年上	校門のかしの木	
		手ということば	
		もんしろちょう	
	国語 第四学年中	汽車の中 ◇	
		作文	6/8
		にげたらくだ	(75%)
国語 第四学年下	天の川	1/7	
		(14%)	
	組みあわせ		
5	国語 第五学年上	音というもの ◇	3/12
		一びきのくも ◇	(25%)
		美しいもの	
	国語 第五学年中	あなたの思っていることは	
		発明二つ ●	4/7
		私の妹	(57%)
6	国語 第五学年下	やりなおし	
		雨の中	3/9
		いいにくいことば ◇	(33%)
	国語 第六学年上	小さな行	
		光を求めて	
		伝説	
7	国語 第六学年中	ことばのはたらき	5/11
		ある写真帳	(45%)
		真理	
	国語 第六学年下	みどりの野	3/7
		ホートン風景 ●	(43%)
		外国からきたことば	
		星の光	
		雪の映画 ◇	4/10
		マッチ売りのむすめ	(40%)
		まさに立つべし	1/7
			(14%)
80/154 (52%)			

【註】

- ・「●」は「アサヒ読本」から、「◇」は「暫定国語教科書」後期用から再録された教材である。
- ・「割合」欄は、収録教材数に占める石森教材数とその割合（小数第一位を四捨五入）である。

2) 石森教材の三つの内容的特徴

(1) 作文教材の積極的採録とそのルーツとしての『綴方への道』

吉田裕久は、「みんないいこ読本」に収録された作文教材を「同年代の子供の作文例を示すことによって、学習者の作文を具体的に導くもの」と「作文を実作するときの具体的な注意を与えるもの」に分類して、「どちらも、石森が得意とした手法であった。というのは、石森にはすでに『綴方への道』(昭和10.11、啓文社)という著作があり、こうした作文についての手ほどきはすでにお手の物であった」⁴⁵と指摘した。しかし、吉田は『綴方への道』の内容に触れておらず、「お手の物であった」ということの実態は分明でない。本稿では、石森の作文教材の特徴を、『綴方への道』との関係を問いながら明らかにする。先に結論を述べておけば、そこには、心と文の結びつきの強調、推敲の重視、指導体系という三つの共通項が見出せる。

別稿で論じたように⁴⁶、『綴方への道』は、文章を執筆すること＝心を具現化する作業と捉える立場から、文字や文章を心そのものとする理論構造に基づき行論された。こうした意識は「みんないいこ読本」所収の石森教材からも明確に看取される。

たとえば、読むことと書くことを意識化させる1年生の教材「よみかき」は、読むことと書くことの出発点は「こころ」にあると説く。6年生の教材「雪の映画」では、同じ題材を扱っても作者により文章が異なることに注目させ、「どのような文章でも、読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたくながめた人によって書かれた文である」⁴⁷とまとめており、1年生から6年生までをとおして、文と心の結びつきが強調されている。

石森の作文教材における二つ目の特徴は、推敲を重視して具体的にその方法を説明することである。20頁以上にわたり推敲について説明した「作文」をみてみよう。同教材では、推敲を彫刻の創作過程になぞらえ、彫刻には骨組みに肉付けする方法と削る方法があることを紹介し、前者は「ちょうど、文章をくわしく書きたすのににて」おり、後者は「文章をきりつめていくのと同じ」⁴⁸だと述べ、推敲における加筆と修正を理解させようとする。これとまったく同様の説明が、『綴方への道』のなかで展開されている⁴⁹。

三つ目は、作文教育の体系である。『綴方への道』では、読み手と表現形態の二つの要素を組み合わせ、1学期には特定の相手に向けた手紙類を、2学期には自分に向けた日記類を、3学期には多数の相手に向けた作品類を執筆するという年間指導概略が示された。

「みんないいこ読本」に目を転じ、3年生用に収録された三つの作文教材——「心と心」「学級日誌から」「かべ新聞」をみると、1学期に学ぶ「心と心」は児童間の手紙、つぎに学ぶ「学級日誌から」は児童が執筆した1週間分の日記、最後に扱う「かべ新聞」は児童が執筆した(という設定の)随想や短文、物語などの作品類を盛り込んだ新聞であり、これらをとおして作文の意味や心持ち、方法などを学ぶように構成されている。これらの教材内容と配列が『綴方への道』の年間指導概略と対応することは明白である。

(2) 演劇教材の教育的効用への着目

「みんないいこ読本」に収録された教材は、従来とは異なる基準により分類されている。石森に聞くと、「すでに多くいわれてきた分類の基準」が「公民的教材とか、科学的教材とか、地理的教材、説話的教材、韻文教材、女子教材」のような「素材によ」るものであったのに対して、「みんないいこ読本」の教材は「詩情を主としたもの」「思索・記録を主としたもの」「物語を主としたもの」「演劇を主としたもの」「このほかに、零の単元として、言語自体に関する教材群」⁵⁰によって分類された。このように「内容本位の分類から、表現本位の分類へ移行した」教材分類の転換は、「国語教科書の一大変革を確かに実現した」⁵¹メルクマールとされる。本稿の視角から重要なのは、「みんないいこ読本」において演劇教材が分類の一領域をなすほど重要視されたということである。

演劇教材という観点から石森教材を見渡してみると、まず注目されるのが、『こくご二』の巻末教材、1年生が最後に学ぶ教材に位置づけられた「春をむかえに」である。同教材は、「これはよびかけです。みんなでかんがえて、やりましょう」という一文からはじまる戯曲であり、「しゃしょう」「ぼち」「みけ」「からす」「すずめ」「ぶた」「みんな」による会話を劇化した教材である。同教材のほかにも、「やまびこ」「かげえ」「うらしまたろう」「はごろも」「イソップものがたり」「もんしろちょう」「にげたらくだ」は、先にみた教材分類のうちの「演劇を主としたもの」に数えられ、石森教材に限定せず「みんないいこ読本」全体をみれば、計20教材が「演劇一般のむれ」に分類される⁵²。

石森によれば、「国語の学習時に、芝居を演じてみるのは、何の国語力を育てることにならないようだが、実はそうではなく、演じる子どもたちは発声方法や用語の選択、表情や仕草などを学び、「見物している児童・生徒たち」にとっても感想や批評の材料となり、『話しかた』の練習⁵³ができるという。また、「人前に立つていう自信」や、準備段階で「協力して一つのを仕あげていくという精神や言動」⁵⁴をも学び得るとされる。また別の論考では、教材を演劇化する「教育上、大きなねうち」は、「みんなと仲がよくなる」ことや「自分の生活をふりかえる」こと、「共同して仕事する喜びを味わう」こと、「文学の鑑賞力がつく」⁵⁵ことにあると論じられている。同論考では、「国語教科書に、脚本が出て来た時」と「学芸会などでやる」⁵⁶演劇が区別なく扱われており、石森がそれらを統一的に捉えていたことがわかる。「みんないいこ読本」で積極的に導入された演劇教材には、狭義の言語学習のための教材にとどまらない広範な教育的効用が期待された。

(3) 国語教育における道徳的価値の規定

「みんないいこ読本」の編纂に参加した沖山光は、石森が「第一冊目が教科書編修の山場となる。これで勝負は決まる……殊に最初の教材に何を提出するかによって、その教科書がその後どのように発展するか」⁵⁷が決まるという国語教科書観をもっていたと証言する。「みんないい